

編集後記

コロナ禍で組んだ「文化としてのゴミ」という特集。私はこの企画を進めながら、文化とマスクのことを考えずにはいられなくなった。「不要不急」の外出の自粛が呼びかけられる中で露呈したことの一つは、以前は整合性が取れていたように思われていた文化、経済、生命の3領域が実際にはそうでもないということだった。文化は自粛しなければならない経済活動なのか、それとも生命の維持に不可欠な活動なのか。以前ならその境界は曖昧だとか言っていれば済む話だったが、コロナ禍では現実問題としてその葛藤に向き合わざるを得なくなった。一方で、マスクは日常文化として急速に世界中に広まった。そこで忘れてはならないのが、ゴミとしてのマスクである。道端にマスクが落ちている光景を誰もが目にするようになった反面、捨てられたゴミとしてのマスクに誰が携わり、どう処理されるのかについて想像する人は多くないだろう。果たして人々の想像から消えたマスクはもはや文化ではないのだろうか。いやむしろ、こうした状況においてこそ、ゴミとなったマスクを敢えて文化として考える意義があるのではないか。今回の特集はこうした問題を考える上でも役に立つことを願っている。

今号の研究論文はすべて名古屋大学関係者以外の執筆者によるものとなった。創刊以来初めてのことである。『JunCture 超域的日本文化研究』は外部にも開かれていることを一つのモットーとしているので、今後も学外からの投稿を歓迎したい。一方で、査読には、編集委員を含め総勢14名の名古屋大学関係者が携わった。ご協力いただいた方には、心より感謝申し上げます。創刊から継続してデザインを担当して下さっている金武智子さん、英文校閲を手伝って下さった院生のクリストファー・カブレラさん、校正作業の補助を務めて下さった超域文化社会センターRAの陳敏さんと杉山雅梨華さんにも謝意を表したい。

(藤木秀朗)